

# 構成吟 「神奈川を詠う」 ―漢詩と共に旅をしまししょう―

明治の文豪 夏目漱石の「函山雑詠」で箱根を出発。湘南は2020年全国漢詩大会で文部科学大臣賞を受賞した故 城田六郎の「酒匂川の畔の村酒」、江の島は江戸時代の漢詩人 菅茶山の「絵島」。その他「湘南海岸に箱根駅伝とサーフィンをみる」「頼朝故宮」「鶴陵廟偶成」「葉山海岸に岳を望む」「横浜」と、漢詩と共に横浜まで旅をしてまいります。

## 漢詩一覧

箱根			
一.	函山雑詠 八首其二	夏目漱石	五言律詩 2
湘南			
二.	湘南海岸見箱根駅伝与滑瀾	岡崎満義	七言絶句 3
三.	酒匂川畔村酒	城田六郎	七言絶句 4
江の島			
四.	絵島	菅茶山	七言絶句 5
鎌倉			
五.	頼朝故宮	太宰春台	七言絶句 6
六.	鶴陵廟偶成	秋吉邦雄	七言絶句 7
葉山			
七.	葉山海岸望岳	鈴木豹軒	七言絶句 8
横浜			
八.	横浜	嵩古香	七言絶句 9

注)白文の字体は、出典図書に従っており、旧字には必ずしもこだわっておりません。

一・函山雜詠 八首其二 函山雜詠 八首其の二 夏目漱石

函嶺勢崢嶸 函嶺勢崢嶸たり

登来廿里程 登り来たる廿里の程

雲従鞋底湧 雲は鞋底より湧き

路自帽頭生 路は帽頭より生ず

孤駅空辺起 孤駅 空辺に起こり

廃関天際横 廃関 天際に横たはる

停筇時一顧 筇を停めて 時に一顧すれば

蒼靄隔田城 蒼靄 田城を隔つ

出典 石川忠久著「東海の風雅」

作者

夏目漱石（一八六七～一九一六） 東京の人。明治の文豪。

語釈

○函嶺…箱根の山。○崢嶸…険しくそそり立つ。○天際…空のはて。

○田城…小田原の街。

通釈

箱根の山は険しくそそり立つ、二十里の道程を登つて来た。雲が鞋底から湧き、路は帽子の上から出てくる。山の駅がポツンと立ち、昔の関所が空のはてに横たわっている。杖を休めて振り返れば、蒼い靄の向こうは小田原の街だ。

解説

漱石二十四歳の作。東京大学で正岡子規と親しくなり、漢詩の応酬が始まりました。この詩も漱石から子規へ寄せられたものです。山の険しさの表現について二人のやり取りが残されています。

## 二・湘南海岸見箱根駅伝与滑瀾

岡崎満義

湘南海岸に箱根駅伝と滑瀾サーフィンを見る

雪峰映海此迎新 雪峰 海に映じ 此に新を迎える

走路人兼滑瀾人 路を走る人と瀾なみを滑る人と

世上躁狂都似夢 世上の躁狂 都すべて夢ごとの似し

乗風奔放楽青春 風に乗り奔放 青春を楽しまん

出典 岡崎満義著「平成の漢詩あそび」

### 作者

岡崎満義 神奈川県漢詩連盟元会長

### 語釈

○雪峰…冠雪の富士山のこと。○滑瀾人…サーファーのこと。

○躁狂…うかれ、くるうさま。うるさいこと。

○奔放…ものにとらわれないさま。思うがまま。

### 通釈

冠雪の富士山の姿が相模の海に映り、このようにして新年を迎える。それは箱根駅伝のランナーも同じだし、サーフィンを楽しんでいる若者も同じである。世の中のうちかれ狂うさまはまるで夢のようである。サーファーよ、風に乗って思うがままに青春を楽しんでくれたまえ。

### 解説

正月恒例のスポーツといえば、今年100回を迎えた箱根駅伝があります。湘南の地に住む岡崎満義氏による本詩は、箱根駅伝のランナーが駆け抜けていくその近くの海でサーファーが波乗りを愉しんでいる風景、これこそが湘南の正月だと詠います。

### 三・酒匂川畔村酒

酒匂川の畔の村酒

城田六郎

嶽麓發源清冽川

嶽麓がくろくに源みなもとを發す清冽の川

麴塵粳稻僻村傳

麴塵きくじん粳稻こうとう僻村に伝う

綠醅初熟醍醐味

綠醅りょくぱい初めて熟し醍醐だいごの味

一斗十千何惜錢

一斗十千何ぞなん錢ぜにを惜しまんや

作者

故城田六郎 神奈川県漢詩連盟元会員

語釈

- 酒匂川：小田原のすぐ東を流れる川。○嶽麓：富士山の裾野を指す。
- 清冽：水が澄んで冷たいさま。○麴塵：こうじの菌。○粳稻：うるち米。
- 僻村：いなかの村。○綠醅：緑色の美酒。○醍醐味：美酒のたとえ。
- 一斗十千：漢詩でよく用いられる高い酒を表す表現。

解説

小田原のすぐ東には酒匂川が流れており、かつては氾濫を繰り返し農民を苦しめましたが、今は穏やかな川となりました。酒匂川の河畔には優れた酒造元があり、新酒の時期に訪れた作者の故城田六郎氏が酒匂川の水の清らかさと酒の味の素晴らしさに魅了され詠んだ七言絶句です。本詩は第二十五回国民文化祭・みやざき 2020 全国漢詩の祭典で最高賞である文部科学大臣賞を受賞しています。

## 四・絵島

絵の島

菅茶山

山陽諸島列成隣

山陽の諸島列して隣となりを成す

佳境各堪誇北人

佳境おの各おのの北人に誇るに堪たへたり

一事唯難及斯地

一事た唯ただ斯この地に及び難がたし

芙蓉隔海露全身

芙蓉ふよう海を隔あてて全身を露あらはす

出典 石川忠久著「東海の風雅」

### 作者

菅茶山（一七四八―一八二七） 備後神辺かんなべ（広島県福山市）の人。

十九歳で京都へ出て学問を積み、三十四歳で郷里の神辺に塾を開き、その後塾は福山藩の郷塾となり、本人は藩の儒官に取り立てられた。藩主の命で、二度江戸へ出て、幕府の儒官や詩人らと交わりを結んだ。江戸時代の漢詩人として著名。

### 語釈

○絵島…江の島。芙蓉…富士山のこと。

### 通釈

山陽の瀬戸内せとうちの島々は隣り合って並び、その好景はそれぞれ、北の方の人に自慢する。だが、ただ一つ、及ばないものがある。それは、美しい富士山が海に向こうに全身を現わしている景色である。

### 解説

今から190年ほど前、片瀬海岸に立った作者が目の前まへの江の島と海の向こうの富士山に心を打たれ詠んだ漢詩です。茶山の郷里、瀬戸内海の景色を自慢しつつも、富士の姿にはどうしても及ばないと詠んでいます。芙蓉とは蓮の花のこと、雪をかぶる富士山を蓮の花びらに見立てています。

## 五・頼朝故宮

頼朝故宮

太宰春台

独騎鷹揚定大東

独騎 鷹揚ようようとして大東を定む

千秋霸業壯関中

千秋の霸業関中に壮たり

繁華銷尽青山下

繁華 銷きえ尽す青山の下

禾黍離離戰晚風

禾黍かしよ離々として晚風そよに戦ぐ

作者

太宰春台（一六八〇—一七四七） 信濃飯田の人。江戸中期の儒学者。

三十二歳で荻生徂徠に入門。経書経済に通じ、詩文の服部南郭、経義の春台と並び称された。

語釈

○故宮…もとの宮殿。○大東…日本のこと。○千秋…千年。長い年月。

○霸業…天下統一の事業。○禾黍離離…稲やきびがよく実っているさま。

通釈

独りの武人が飛揚する鷹のように悠然とこの国を平定し、長い年月の間天下統一し関東にあつて盛んであつた。今は昔の繁華も消えて青山の麓は田畑となり、いねやきびがたわわに実つて夕風にそよいでいる。

解説

源頼朝は八幡宮を鎌倉の中心とし、若宮大路をはじめとする道路や町づくりを行い、本宮を造営して若宮と分離し、征夷大將軍や頼家・実朝などの叙位任官の際には、本来ならば京都の内裏で行われるべき拝賀の儀式のすべてを鶴岡八幡宮で済ませています。このことも、鎌倉が頼朝故宮と言われる所以の一つかもしれません。神漢連叢書として発刊した「歩こう神奈川 漢詩八十景」に採録しています。

六・鶴陵廟偶成

鶴陵廟偶成

秋吉邦雄

亭亭朱廟屹青天 亭々たる朱廟 青天に屹そばだち

鬱鬱綠雲纍紫烟 鬱々たる緑雲 紫煙を纍まとう

磴上偏憐小靈樹 磴上偏ひとえに憐あわれむ 小靈樹

藥栽期得又千年 藥栽期げっさいし得たり 又た千年

作者

故秋吉邦雄 神奈川県漢詩連盟元会員

語釈

○鶴陵廟：鶴岡八幡宮○鬱鬱：樹木のこんもりと茂るさま。

○藥：ひこばえ。枯れた樹木や切り倒されたりした樹木の切り株から出る新芽。

通釈

朱色に階を連ねる社殿が、青色の空へとそびえ立っている。緑色のこんもり茂る木々が紫色の霧を身に纏っている。石段の上の小さな靈木に、ひたすら胸を打たれる。そこから若芽が伸び、さらに千年の生命を得たのだ。

解説

鶴陵廟とは鶴岡八幡宮のことで、平成22年突然倒れた大銀杏を詠っています。薬とは切り株から出た芽、ひこばえのことです。本詩は、平成二十八年度 全日本漢詩大会京都大会で特別賞を受賞しています。審査委員長の石川忠久先生は「晴天に屹そばだつ鶴ヶ岡八幡宮の昔に変わらぬ威容と、銀杏のひこばえとを対比させ、このひこばえもやがては千年の老樹となる、と結び、八幡宮にこもる歴史の永遠を詠う。赴おもむき深い作だ。」と評されています。

七・葉山海岸望岳

葉山海岸より岳を望む

鈴木豹軒

雪岳半肩蒼靄間

雪岳半肩 蒼靄の間

海天如拭碧波閒

海天拭ぬぐふが如く碧波かん閒なり

秀容千古終無改

秀容千古終ついでに改あらたまる無し

真是乾坤第一山

真に是れ 乾坤けんこん第一の山

出典 石川忠久著「東海の風雅」

作者

鈴木豹軒（一八七八―一九六三） 新潟の人。

東京へ出て、旧制一高を経て、東大の漢学科を卒業した。同級に宇野哲人がいる。明治の末、京都大学が設立されると、漢詩文担当の教授となる。京大の同僚には、内藤湖南、幸田露伴らがいて、共に京都の中国学の礎を築いた。

語釈

○岳：富士山を指す。○閒：閑。○乾坤：「易経」の語。「天地」をいう。

通釈

雪を半分かぶったお山が、蒼あおい霞の中に立つ。海も空も拭ぬぐったように青く、波も静か。秀でた姿は永遠に改あらたまることはない。本当にこのお山は、天下第一だ。

解説

富士山の眺めが素晴らしい葉山の海岸風景を詠じています。誰もが抱く富士山への思いを素直に詠ったもので「乾坤第一の山」とはこれ以上ない形容です。

## 八・横浜

横浜

嵩古香かきみここう

隔海孤洲別作郷

海を隔へだつる孤洲こしゅう別に郷きょうと作なる

満街奇貨各豪商

街まちに満みつる奇貨おの各おのの豪商

誰知繡戸瓊楼地

誰か知らん 繡戸しゅうこ瓊楼けいろうの地

旧是漁郎晒網場

旧もとは是れ漁郎ぎよらうの網あみを晒さららすの場ばなるを

出典 石川忠久著「東海の風雅」

### 作者

嵩古香（一八三七—一九一九）

埼玉県松山市にある真言宗大谷派の了善寺りょうぜんの住職。しばしば江戸へ出て詩人たちとも交流し、約一万首の詩を残している。

### 語釈

○隔海孤洲：横浜の立地条件が、大岡川によって東海道筋から分けられ、あたかも長崎の出島のように孤立していたことによる。

### 通釈

海を隔あひて一つの島が別天地となっている。街まちに溢あふれる珍しい品物を売るのは、それぞれ豪商たちの店。美しい高どのや館やかたが立ち並んでいる土地は、もとは漁師の網を干す場所だったとは、誰が知ろう。

### 解説

文明開化と共に横浜の夜明けが始まりました。漁師の寒村に過ぎなかつた土地に妓楼や洋館が林立する変わりようを詠います。開港わずか1年半ですすでに華な街に変貌していたことを証する資料となる詩です。